

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）	研究 0-1
1. 教育文化学部・教育学研究科	研究 1-1
2. 医学部・看護学研究科	研究 2-1
3. 工学部・工学研究科	研究 3-1
4. 農学部・農学研究科	研究 4-1
5. 医学獣医学総合研究科	研究 5-1
6. 農学工学総合研究科	研究 6-1

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果（概要）

学部・研究科等	研究活動の状況	研究成果の状況	質の向上度
教育文化学部・教育学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
医学部・看護学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
工学部・工学研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
農学部・農学研究科	期待される水準を上回る	期待される水準を上回る	大きく改善、向上している
医学獣医学総合研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している
農学工学総合研究科	期待される水準にある	期待される水準にある	質を維持している

注目すべき質の向上

農学部・農学研究科

- 平成 23 年度に宮崎県口蹄疫復興対策運用型ファンド事業の採択を受け、産業動物防疫対策、畜産業の復興、再発防止に向けた人材育成を柱とするプロジェクトを推進しているほか、産業動物防疫リサーチセンターを設置している。

教育文化学部・教育学研究科

I	研究の水準	研究 1-2
II	質の向上度	研究 1-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における年度当たりの研究成果の発表状況について、論文数は約85.8件、著書数は約32.2件、学会発表数は約145.8件となっている。
- 宮崎県における地域に根差した海洋教育推進ネットワークの構築事業（日本財団助成金）では、平成26年度に宮崎県内小中学校5校と研究授業を実施し、海洋教育の授業実践モデルを提案している。

以上の状況等及び教育文化学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に科学教育、特別支援教育、臨床心理学、芸術一般、教育心理学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、科学教育の「衣生活学習の基礎理解と修得に関する研究」及び「色素増感太陽電池の教材化に関する研究」、特別支援教育の「障害のある子どもの行動問題の変容に関する研究」、臨床心理学の「子どもの抑うつ予防に関する研究」、芸術一般の「経験年数の異なる吹奏楽指導者の演奏指導方法と指導観の比較」、教育心理学の「不登校対策に関する研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に芸術一般、地理学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、芸術一般の「声楽作品における歌唱表現法研究」、地理学の「行商活動に関する研究」がある。

以上の状況等及び教育文化学部・教育学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、教育文化学部・教育学研究科の専任教員数は 88 名、提出された研究業績数は 18 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 13 件（延べ 26 件）について判定した結果、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 5 件（延べ 10 件）について判定した結果、「S」は 8 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における研究成果の発表数は、年間合計 290 件から 317 件の間を推移している。作品・演奏の件数は平成 22 年度の 8 件から平成 27 年度の 25 件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 地理学の「行商活動に関する研究」で、著書は地理学地理空間学会賞学術賞や地域漁業学会賞を受賞するなど、第2期中期目標期間に合計 13 件の学会賞等を受賞している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

医学部・看護学研究科

- I 研究の水準 研究 2-2
- II 質の向上度 研究 2-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成22年度から平成26年度における審査付学术论文数は合計2,477件（和文903件、欧文1,574件）、教員一人当たりの年度平均は1.5件となっている。また、特許は年度平均11.8件出願し、7.4件取得している。
- 科学研究費助成事業の採択状況は、平成22年度の92件（約1億1,500万円）から平成27年度の112件（約1億6,900万円）となっている。

以上の状況等及び医学部・看護学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に医化学一般の細目において卓越した研究成果がある。また、HTLV-1ウイルスや成人T細胞白血病（ATL）の研究では、トップジャーナルへの掲載を含む30件以上の欧文論文を発表している。
- 卓越した研究業績として、医化学一般の「小胞体ストレスセンサーOASISによる骨形成制御に関する研究」があり、小胞体に生じた生理的ストレスをOASISが感知することで、正常な骨形成が生じることを解明し、第30回日本骨代謝学会（平成24年）高得点演題賞を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、腫瘍生物学の「成人T細胞白血病(ATL)の発症機序に関する研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に消化器内科学の細目において特徴的な研究成果がある。また、生理活性ペプチドの臨床応用研究では、我が国2例目の医師主導治験の成果を公表したほか、宮崎大学で発見されたアドレノメデュリンのフェーズⅠの医師主導治験を開始している。
- 特徴的な研究業績として、消化器内科学の「アドレノメデュリン(AM)を用いた炎症性腸疾患の新規治療薬開発（創薬）に関する研究」がある。

以上の状況等及び医学部・看護学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、医学部・看護学研究科の専任教員数は 173 名、提出された研究業績数は 32 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 32 件（延べ 64 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 5 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 22 件（延べ 44 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 4 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）と第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の年度平均を比較すると、科学研究費助成事業の採択状況は81件（約1億5,200万円）から104件（約1億7,000万円）、受託研究の受入状況は26件（約7,000万円）から39件（約1億9,100万円）となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- ATL研究や生理ペプチド研究では、治療方法の開発、医師主導治験の開始等の成果があがっている。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

工学部・工学研究科

I	研究の水準		研究 3-2
II	質の向上度		研究 3-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の論文発表数は合計761件、著書数は合計70件、学会発表数については、国内の学会発表数は合計2,370件、国際学会発表数は合計543件となっている。
- 第2期中期目標期間における科学研究費助成事業の採択件数は26件から46件、受託研究及び共同研究の受入件数は49件から63件の間を推移している。

以上の状況等及び工学部・工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理において特徴的な研究成果がある。また、研究成果がインパクトファクターの高い国際論文誌へ掲載されている。
- 特徴的な研究業績として、素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理の「X線およびγ線を用いた超新星残骸の観測的研究」がある。これにより、超新星爆発を引き起した星が、太陽よりも数倍多くの割合で重い元素を含んでいたことを明らかにしている。
- 社会、経済、文化面では、機能物性化学、リハビリテーション科学・福祉工学において特徴的な研究成果がある。また、エネルギー・環境問題に対する要素技術の開発、産業廃棄物を有効利用したハイブリッド型地盤材料の開発、ダム貯水池の濁水原因土砂の発生源追跡に関する研究等、社会的課題の解決につながる研究成果をあげている。
- 特徴的な研究業績として、機能物性化学の「ナノ構造と物性の相関の明確化と特性向上及び新規材料の開発設計指針の確立」の研究、リハビリテーション科学・福祉工学の「生体信号計測・解析技術を用いた福祉機器の開発に関する

研究」がある。

以上の状況等及び工学部・工学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、工学部・工学研究科の専任教員数は 92 名、提出された研究業績数は 9 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 6 件（延べ 12 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 8 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 4 件（延べ 8 件）について判定した結果、「S」は 8 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 教員の論文・著書の発表状況について、第1期中期目標期間（平成16年度から平成21年度）の年度平均と第2期中期目標期間の年度平均を比較すると、論文（英文）発表数は83.0件から96.3件、著書（和文）の発表数は4.3件から9.0件、著書（英文）の発表数は1.5件から2.7件となっている。
- 共同研究の受入件数については、第1期中期目標期間の年度平均21.3件から第2期中期目標期間の年度平均37.2件となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間に「未利用資源の分離回収と有効利用に関する研究」等、素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理や機能物性化学の細目等で特徴的な研究成果をあげており、文部科学大臣表彰（研究部門）、化学工学会の Outstanding Paper Award（優秀論文賞）、環境資源工学会優秀論文賞を含め合計37件の賞を受賞している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

農学部・農学研究科

I	研究の水準		研究 4-2
II	質の向上度		研究 4-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 発表論文数は、平成16年度から平成19年度の平均211.8件から、平成22年度から平成26年度の平均252.0件へ増加している。
- 科学研究費助成事業の採択状況は、平成22年度の44件（約7,910万円）から平成27年度の66件（約1億3,300万円）へ増加している。
- 宮崎県における口蹄疫や鳥インフルエンザの発生に対処するために、平成23年度に宮崎県口蹄疫復興対策運用型ファンド事業の採択を受け、産業動物防疫対策、畜産業の復興、再発防止に向けた人材育成を柱とするプロジェクトを推進しているほか、産業動物防疫リサーチセンターを設置し、農学部から専任教員3名を配置している。
- 動植物からの新規生理活性物質の探索やそれらの生理作用に関する研究を推進しており、特に、植物ホルモン、葉緑体関連分子、動物の脳下垂体ホルモン及びその標的タンパク質、体温や肥満に関係する生理活性物質、生体の解毒に関係する酵素、新規バイオマーカー等に関する研究において成果がある。

以上の状況等及び農学部・農学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に作物生産科学の細目において卓越した研究成果がある。また、日本農学賞、読売農学賞、日本草地学会賞等の受賞の実績がある。
- 卓越した研究業績として、作物生産科学の「資源植物であるススキ属植物に関する宮崎大学等とイリノイ州立大との国際共同研究」があり、平成26年の阿蘇地域の世界農業遺産認定に貢献しているほか、平成24年度に日本草地学会賞を受賞している。
- 特徴的な研究業績として応用生物化学の「翻訳後修飾としてのチロシン硫酸

化の生理機能解明」がある。

- 社会、経済、文化面では、特に獣医学、水圏生命科学の細目において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、獣医学の「新規肥満マウス創出に関する研究」、水圏生命科学の「陸封型ヤマメの海水養殖技術の確立とその生産性への影響に関する研究」がある。

以上の状況等及び農学部・農学研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、農学部・農学研究科の専任教員数は 116 名、提出された研究業績数は 22 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 19 件（延べ 38 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 7 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 8 件（延べ 16 件）について判定した結果、「SS」は 1 割、「S」は 7 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 大きく改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 23 年度に宮崎県口蹄疫復興対策運用型ファンド事業の採択を受け、産業動物防疫対策、畜産業の復興、再発防止に向けた人材育成を柱とするプロジェクトを推進しているほか、産業動物防疫リサーチセンターを設置している。
- 動植物からの新規生理活性物質の探索やそれらの生理作用に関する研究を推進しており、特に、植物ホルモン、葉緑体関連分子、動物の脳下垂体ホルモン及びその標的タンパク質、体温や肥満に関係する生理活性物質、生体の解毒に関係する酵素、新規バイオマーカー等に関する研究において成果がある。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学術面では、卓越した研究業績として、作物生産科学の「資源植物であるススキ属植物に関する宮崎大学等とイリノイ州立大との国際共同研究」がある。また、特徴的な研究業績として応用生物化学の「翻訳後修飾としてのチロシン硫酸化の生理機能解明」がある。
- 社会、経済、文化面では、特徴的な研究業績として、獣医学の「新規肥満マウス創出に関する研究」、水圏生命科学の「陸封型ヤマメの海水養殖技術の確立とその生産性への影響に関する研究」がある。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 平成 23 年度に宮崎県口蹄疫復興対策運用型ファンド事業の採択を受け、産業動物防疫対策、畜産業の復興、再発防止に向けた人材育成を柱とするプロジェクトを推進しているほか、産業動物防疫リサーチセンターを設置している。

医学獣医学総合研究科

I	研究の水準		研究 5-2
II	質の向上度		研究 5-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）の科学研究費助成事業の採択状況は459件（約13億1,100万円）、共同研究、受託研究の受入状況は333件（約16億4,600万円）となっている。
- 平成22年度から平成26年度の査読付学術論文数は2,904件となっており、そのうち1,996件が英文となっている。
- 平成22年度から平成26年度の学会発表件数は、国際学会での発表は946件（そのうち招待講演52件）、国内学会での発表は6,574件（そのうち招待講演567件）となっている。

以上の状況等及び医学獣医学総合研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に腫瘍生物学、獣医学において特徴的な研究成果がある。そのほか、医学と獣医学の協働による、疾患モデル動物の開発と発症メカニズムの解明、人獣共通感染症対策の確立、生理活性ペプチド研究から創薬への展開等に関する研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、腫瘍生物学の「成人T細胞白血病(ATL)の発症機序に関する研究」、獣医学の「新規肥満マウス創出に関する研究」、「イヌジステンパーウイルスに関する研究」がある。
- 社会、経済、文化面では、特に腫瘍生物学、獣医学、代謝学において特徴的な研究成果がある。そのほか、予防薬、治療薬等の開発に発展し、特許を取得した研究がある。
- 特徴的な研究業績として、腫瘍生物学の「成人T細胞白血病(ATL)の発症機序に関する研究」、獣医学の「新規肥満マウス創出に関する研究」、代謝学の

「経鼻 GLP-1 製剤の臨床応用」がある。

以上の状況等及び医学獣医学総合研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、医学獣医学総合研究科の専任教員数は 144 名、提出された研究業績数は 29 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 29 件（延べ 58 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 6 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 15 件（延べ 30 件）について判定した結果、「SS」は 1 割未満、「S」は 5 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間の科学研究費助成事業の採択状況は 459 件（約 13 億 1,100 万円）、共同研究、受託研究の受入状況は 333 件（約 16 億 4,600 万円）となっている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度の査読付学術論文数は 2,904 件となっており、そのうち 1,996 件が英文となっている。
- 平成 22 年度から平成 26 年度の学会発表件数は、国際学会での発表は 946 件（そのうち招待講演 52 件）、国内学会での発表は 6,574 件（そのうち招待講演 567 件）となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 学術面では、医学と獣医学の協働による、疾患モデル動物の開発と発症メカニズムの解明、人獣共通感染症対策の確立、生理活性ペプチド研究から創薬への展開等に関する研究成果がある。
- 社会、経済、文化面では、予防薬、治療薬等の開発に発展し、特許を取得した研究がある。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

農学工学総合研究科

I	研究の水準		研究 6-2
II	質の向上度		研究 6-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点1－1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 平成22年度から平成26年度の審査付学術論文数の合計は1,278件、教員一人当たり年度平均1.6件となっており、英文の学術論文は全体の77%となっている。また、国際学会での発表件数の合計は740件となっている。
- 科学研究費助成事業の採択数は、平成22年度の55件から平成27年度の81件となっている。
- 研究成果を社会に実装、還元していくことで豊かな地域社会を創造することを目的として、平成26年度に宮崎県及び大阪大学大学院工学研究科との研究連携推進協定を締結している。また、同年度に食の安全・安心と健康の増進を目的とし、民間企業等7機関と「みやざきフードリサーチコンソーシアム」を設立している。

以上の状況等及び農学工学総合研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準にある

〔判断理由〕

観点2－1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準にある」と判断した。

- 学術面では、特に作物生産科学の細目において卓越した研究成果がある。また、当該研究科に設置された自然共生技術センターでは、文部科学省戦略的研究推進プロジェクト「無機・生体触媒反応によるセルロース性資源のバイオ燃料及びバイオ有価物への変換プロセスの開発」（平成21年度から平成26年度）に関わる研究を行っており、平成24年度の外部評価委員評価により「農学と工学の融合した大学院博士課程を設置して、異分野における連合が成功した特筆した例」と評価されている。
- 卓越した研究業績として、作物生産科学の「資源植物であるススキ属植物に関する宮崎大学等とイリノイ州立大との国際共同研究」があり、新ジャイアントミスカンサスの複数系統の発見により、複数の国際的な専門誌において評価

されている。

- 特徴的な研究成果として、生物機能・バイオプロセスの「超分子性ペプチド複合体の自発的形成による生理活性物質の水溶化とバイオアベイラビリティの強化」がある。
- 社会、経済、文化面では、口蹄疫災害や畜産廃棄物による水質汚染の解明等、社会的に重要性の高い課題に取り組んでいる。

以上の状況等及び農学工学総合研究科の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、農学工学総合研究科の専任教員数は 158 名、提出された研究業績数は 6 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 6 件（延べ 12 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 3 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 1 件（延べ 2 件）について判定した結果、「S」以上は 0 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

Ⅱ 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 26 年度の宮崎県及び大阪大学大学院工学研究科との研究連携推進協定の締結、及び「みやざきフードリサーチコンソーシアム」の設立により、平成 27 年度に宮崎県の受託研究 2 件を受け入れるなど、地域と連携した研究活動に取り組んでいる。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 「超分子性ペプチド複合体の自発的形成による生理活性物質の水溶化とバイオアベイラビリティの強化」は、都市エリア産学官連携促進事業（平成 20 年度から平成 22 年度）の研究成果を更に発展させ、最先端・次世代研究開発支援プログラムの採択により展開させた消化ペプチドの薬物分散剤としての有用性を評価した研究となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。